

# 佐賀空襲「語る」焼夷弾残骸

## 佐賀市・北川副公民館保管、鑄鉄製の円盤

### 地域の惨禍、風化させず

佐賀市の北川副公民館に、大人1人では抱えきれない重さの鑄鉄製の円盤がある。歯車のような形をしていて、色は落ち、赤みがかった表面が重ねた月口を物語る。80年前の1945(昭和20)年8月、太平洋戦争の終戦直前に起こった佐賀空襲の焼夷弾の残骸で、地域の惨禍を刻んでいる。

5面に関連記事



さん(66)は円盤に目を向け、大量の森林や村を燃やしながら「こんなものが空から落下してきたとは。当た「ナパーム弾」は、非人道兵器として伝わる。

大都市に比べて軍需工場

保管に至った経緯は不明だが、2009年ごろ、北川副小近くの道路での下水道管理設工事で見つかったという。六角形の金属容器に入った焼夷弾を38本束ねた「集束焼夷弾」の弾頭とみられる。投下する際のおもりだ。公民館長の坪上忠正は、一夜にして約10万人の命を奪った。ベトナム戦争



佐賀空襲が起きた佐賀市北川副町で見つかった焼夷弾の残骸。鑄鉄製の円盤の形をしている。佐賀市の北川副公民館

あれから80年。新興住宅地になつている北川副町では、戦争体験者も少なくなっている。坪上さんは「空襲を知らない若者や子どもが増えている。戦争の記憶を風化させてはいけない」と言う。円盤の公開とともに、平和の尊さを受け継いでいく活動を考えている。

(大田浩司)

